

十勝岳の火山活動解説資料（平成29年4月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。一方、ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にありますので、今後の火山活動の推移に注意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙などの表面現象の状況（図1-①～⑤、図2～6）

17日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、62-2火口や大正火口で噴煙の状況に特段の変化はみられませんでした。振子沢噴気孔群では、2015年6月以降みられている地熱域¹⁾が拡大した状態が継続していました。62-2火口とその周辺では熱活動のやや高い状態が継続していると考えられます。

62-2火口の噴煙の高さは火口縁上200m以下、大正火口の噴煙の高さは火口上100m以下、振子沢噴気孔群の噴気の高さは50m以下で経過しました。大正火口の噴煙量は2010年頃からやや多い状態が続いています。

・ 地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図8～9）

62-2火口付近のごく浅い所（海拔0km以浅）を震源とする火山性地震は、1日あたり10回以下と少ない状態で経過しましたが、長期的にみると、2010年頃からやや多い状態となっています。

グラウンド火口周辺や旧噴火口付近の浅い所（海拔下0～3km程度）を震源とする周辺の地震活動は、引き続き低調に経過しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・ 地殻変動の状況（図10）

GNSS²⁾連続観測では、2006年以降、62-2火口直下浅部の膨張を示すと考えられる変動が観測されています。

より深部へのマグマの供給によると考えられる地殻変動は認められませんでした。

- 1) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を検知して温度や温度分布を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 2) GNSS（Global Navigation Satellite Systems）とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

この火山活動解説資料は、札幌管区気象台のホームページ(<http://www.jma-net.go.jp/sapporo/>)や気象庁のホームページ(<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>)でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、北海道大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号 平26情使、第578号）。また、同院発行の『電子地形図（タイル）』を複製していません（承認番号 平26情複、第658号）。

次回の火山活動解説資料（平成29年5月分）は平成29年6月8日に発表する予定です。

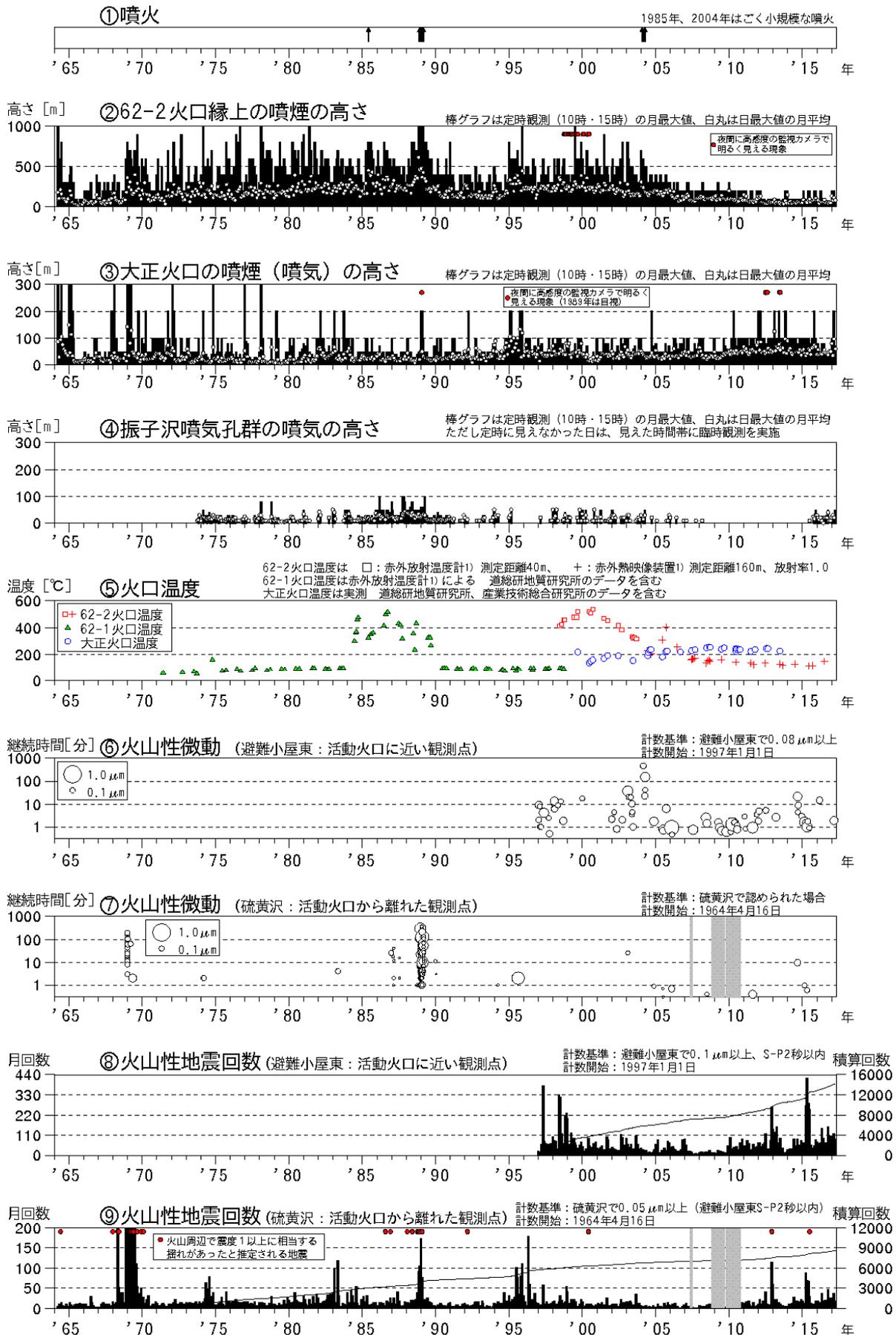


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2017年4月）

⑦⑨：グラフの灰色部分は機器障害による欠測期間を示します

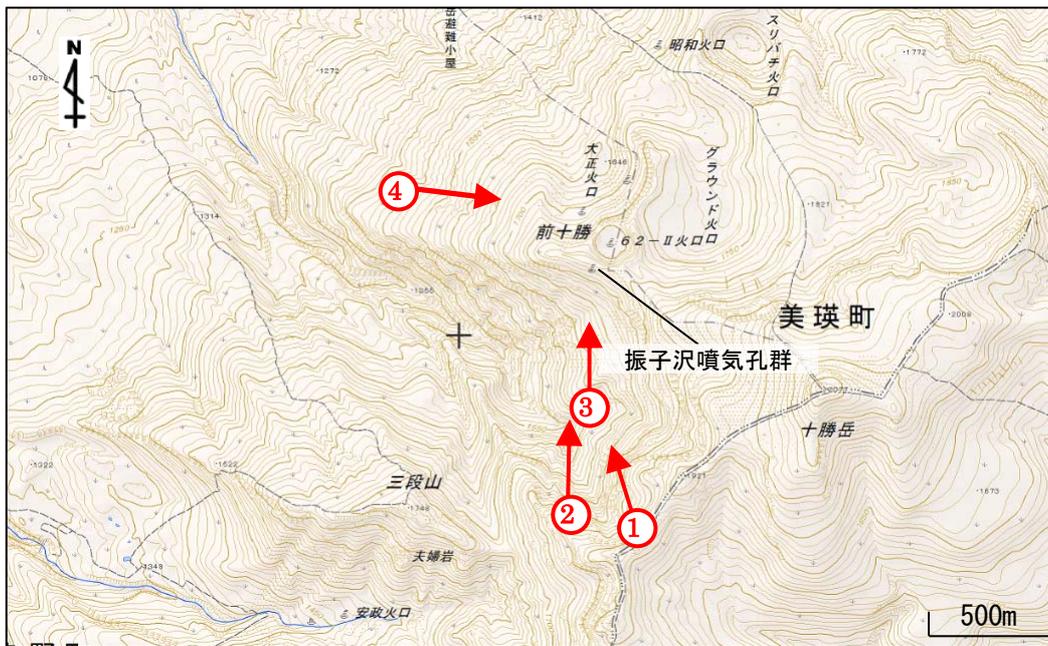


図2 十勝岳 周辺図と写真の撮影方向



図3 十勝岳 振子沢噴気孔群の状況

上：図2中の①から撮影 下：図2中の②から撮影

- ・2017年2月と同様に地熱域に対応した融雪域が認められました。
- ・また、噴気量は2017年2月の方が多く見えますが、これは気象要因によるものと考えられます。

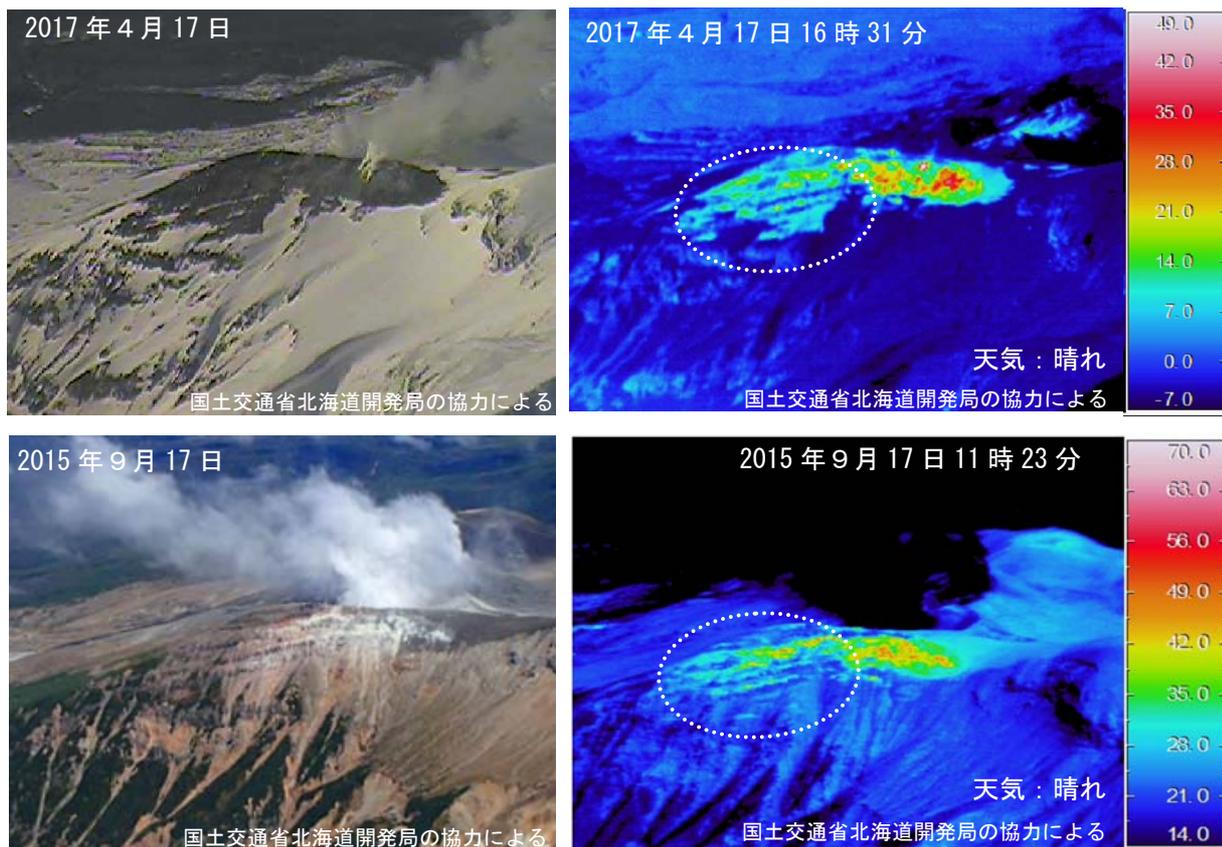


図 4 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群付近の地表面温度分布
 図 2 中の③から撮影
 ・ 2015 年 9 月と比較して、地熱域の拡大（白色破線部）がみられます。



図 5 十勝岳 62-2 火口と大正火口周辺の状況 図 2 中の④から撮影
 ・ 62-2 火口及び大正火口の噴煙の状況などに特段の変化はみられませんでした。



図6 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況
(4月17日、白金模範牧場監視カメラによる)



図7 十勝岳 火口周辺図

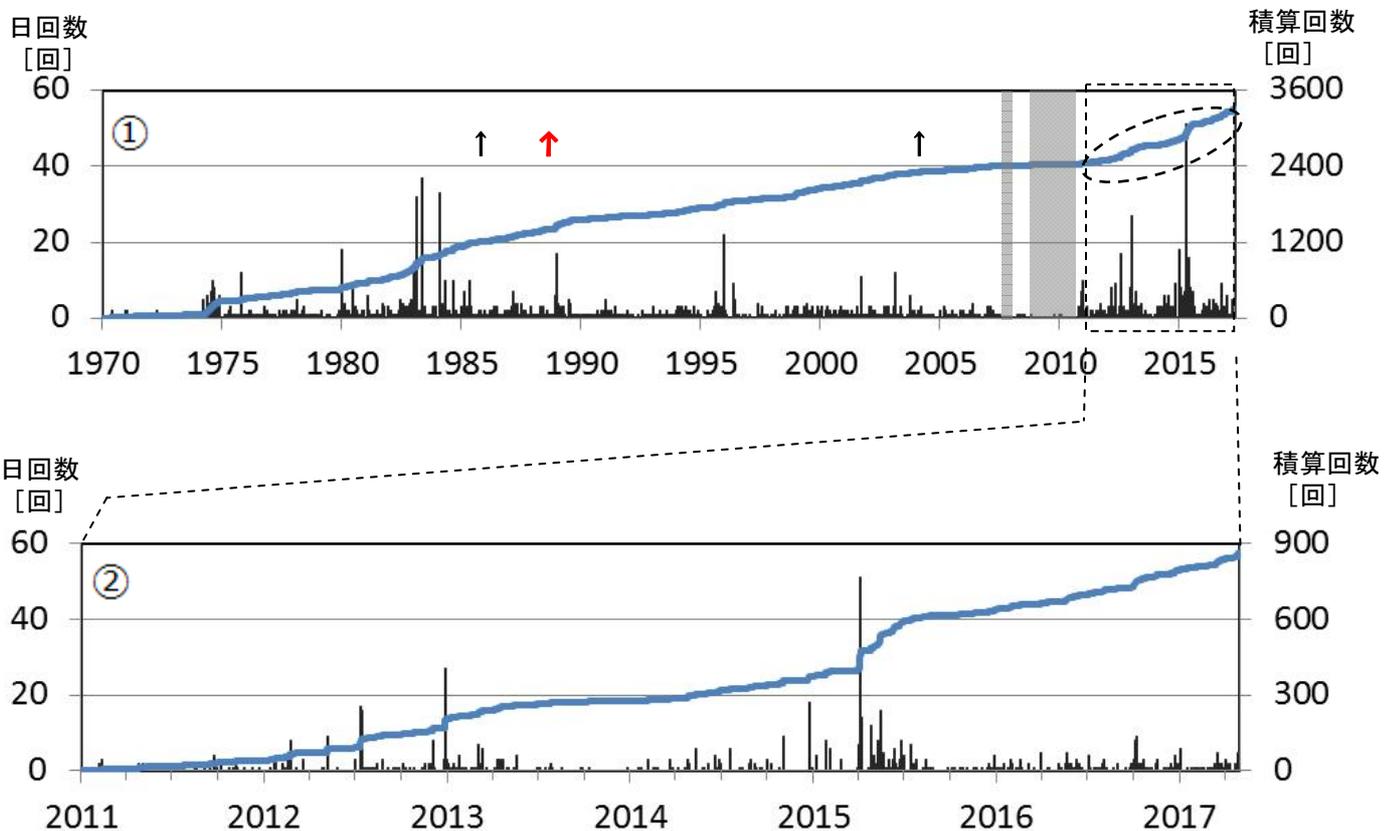


図8 十勝岳 62-2火口付近のごく浅い所の地震（図9参照）の日回数及び積算回数推移
(上図：1970年～2017年4月 下図：2011年～2017年4月)

- ・ 62-2火口付近のごく浅い所で発生する火山性地震は、2010年頃からやや多い状態となっています（上図の楕円破線）
- ・ 62-2火口付近のごく浅い所で発生する火山性地震は、山体浅部のガスや熱水などの熱活動により発生していると考えられます
- ・ ①②は硫黄沢観測点（山麓点）で計測した回数（計数基準：0.05 μ m以上、避難小屋東S-P 2秒以内）を示します
- ・ 青線は積算回数を示します
- ・ ↑はごく小規模な水蒸気噴火、↑はマグマ噴火の発生時期を示します
- ・ 図の灰色の部分は欠測を示しています

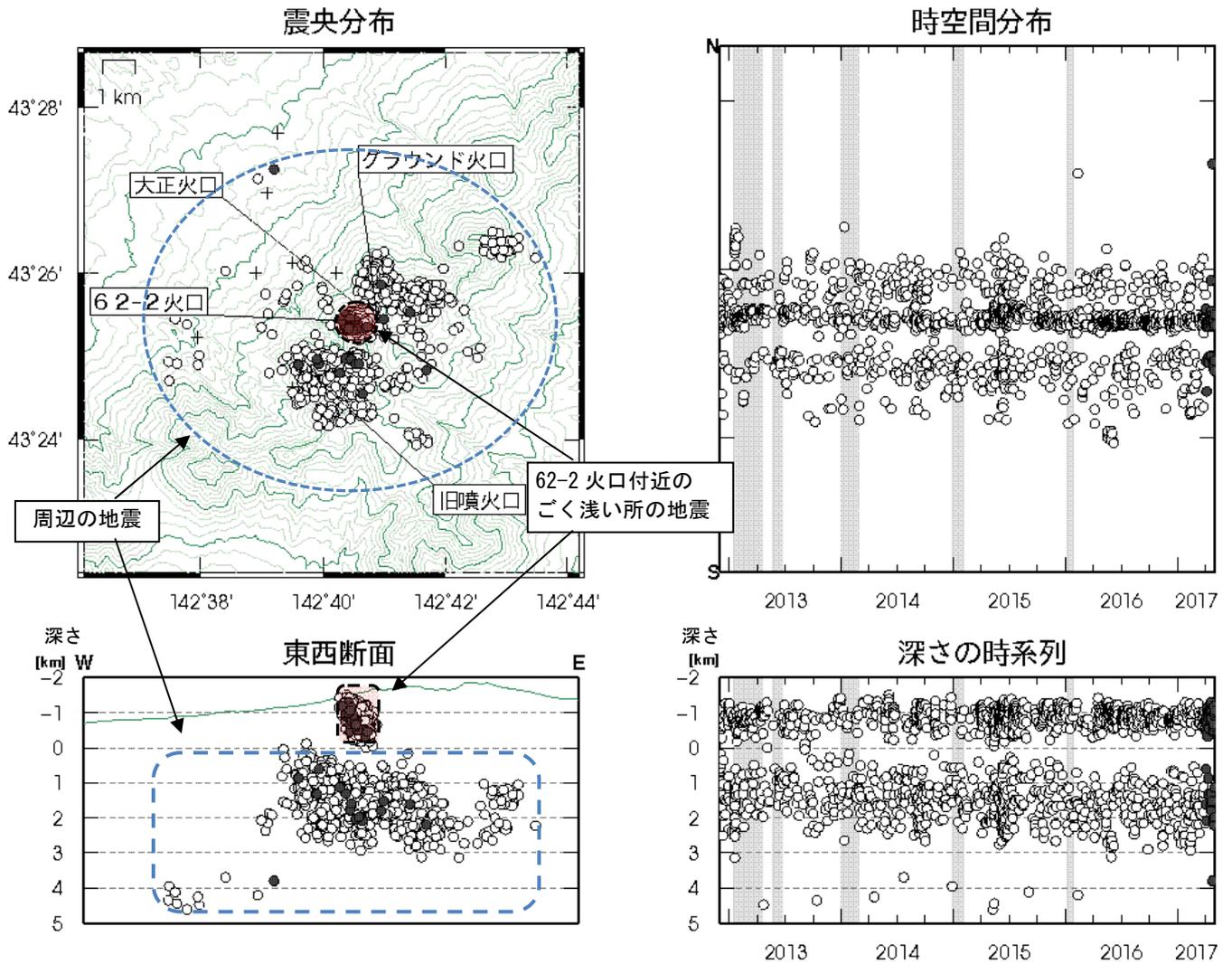


図9 十勝岳 火山性地震の震源分布 (2012年12月~2017年4月)
 ・ 灰色の期間は一部観測点欠測のため、震源については求まる数の減少や精度の低下がみられます
 ○印：2012年12月~2017年3月の震源
 ●印：2017年4月の震源
 +印：地震観測点

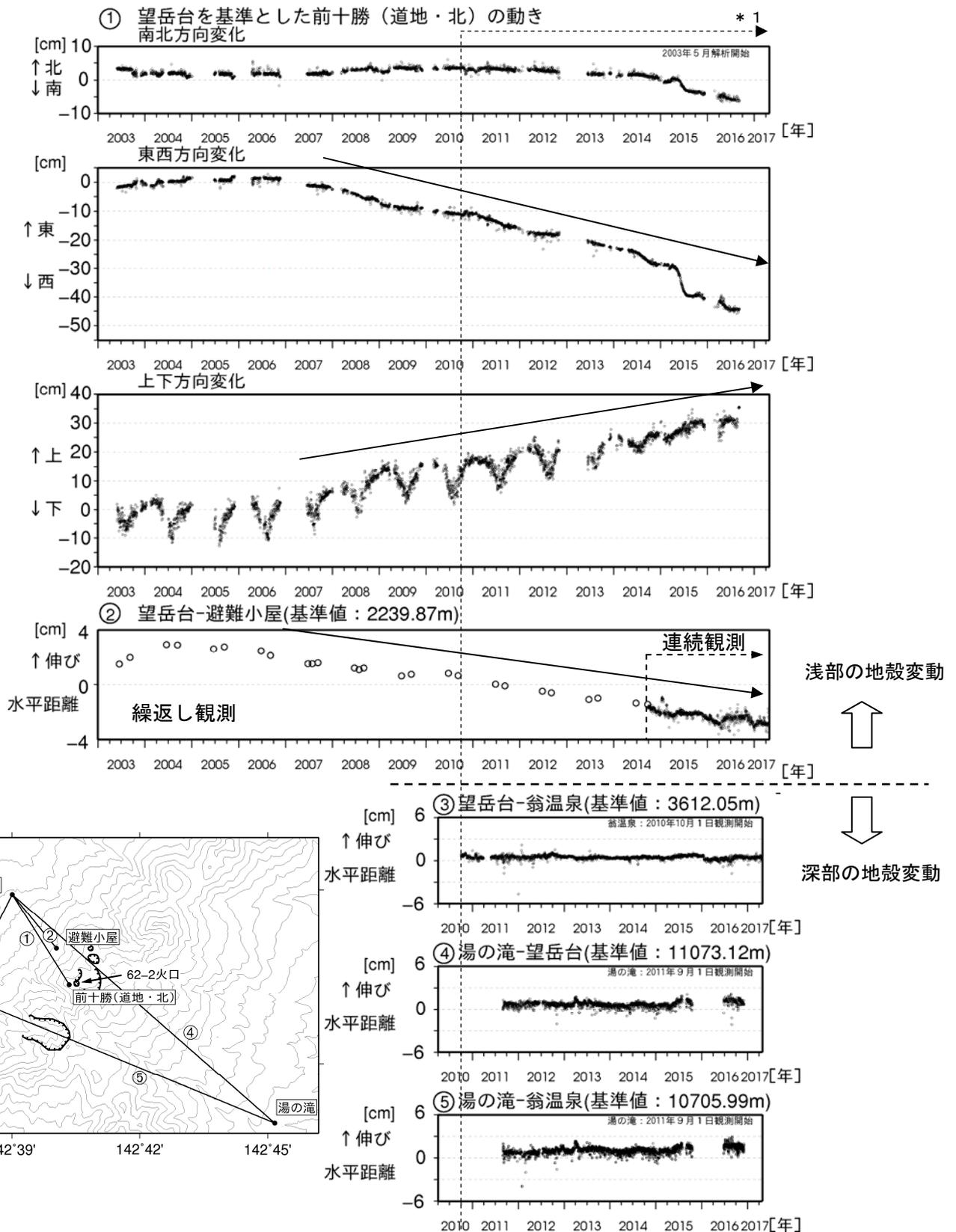


図10 十勝岳 GNSS連続観測による水平距離変化（2003年5月～2017年4月）及び観測点配置図

- ・GNSS基線①～⑤は観測点配置図の①～⑤に対応しています
- ・基線②では2006年頃から62-2火口浅部の膨張を示す動きが観測されています
- ・2016年9月10日以降、前十勝観測点は欠測となっています
- ・2016年12月5日以降、湯の滝観測点は欠測となっています
- ・GNSS基線の空白部分は欠測を示します
- ・（北）：北海道大学 （道地）：地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所
- * 1：2010年10月以降のデータについては、解析方法を改良して精度を向上させています

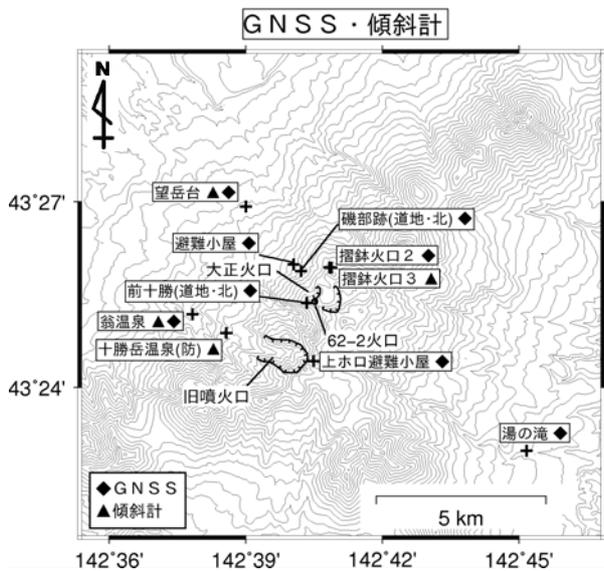
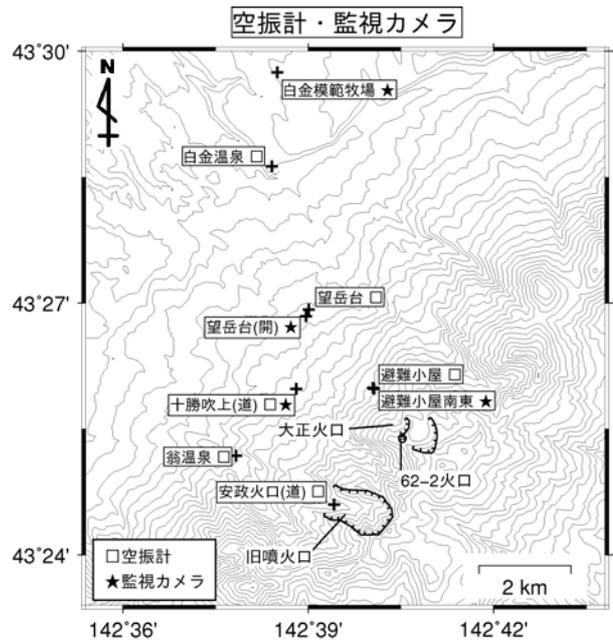
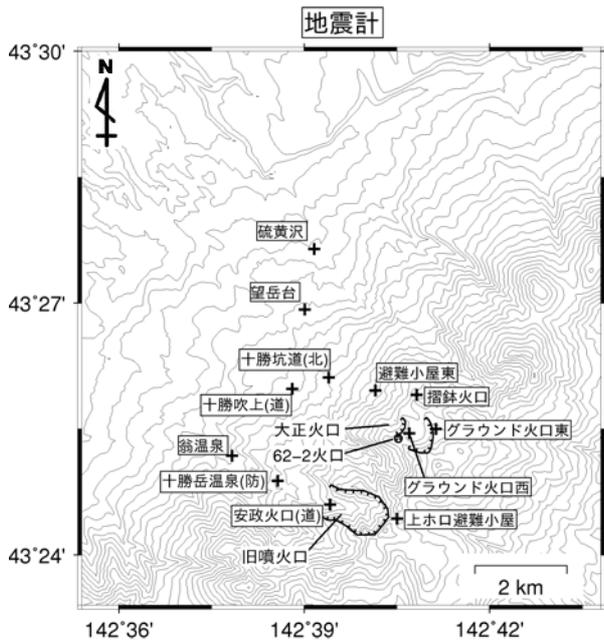


図11 十勝岳 観測点配置図

+印は観測点の位置を示します

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています

- (開) : 国土交通省北海道開発局
- (北) : 北海道大学
- (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所
- (道) : 北海道
- (道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所